

## 7 高齢者への継続的家庭訪問の評価

○藤井 可苗, 菅野 夏子, 中村 有美子, 小野 ツルコ (関西福祉大学看護学部)

### I. はじめに

本学の看護学教育では、平成 21 年度より 1 年次生後期に高齢者への家庭訪問実習を実施している。実習のねらいは、①人々の健康に関する考え方や行動を理解し、健康に関するニーズを理解する基礎的な能力を養うこと ②対象者が利用している福祉サービスや医療機関を知ることにより、看護の幅の広さ、繋がりを理解することである。対象家庭への訪問は、2～4 週の間隔で合計 3 回実施した。本研究では、学生が継続的家庭訪問での経験をどのように活かせると考えているかを明らかにし、今後の実習指導の基礎資料を得ることを目的とする。

### II. 方法

継続的家庭訪問実習を実施した看護学部 1 年次生 102 名を対象とした。無記名自記式アンケート調査を実習終了後に配布し、回収ボックスにて回収した。分析は、学生が記述したすべての文章を抜き出し、意味が同じものをリスト化し、カテゴリーに分けた。なお、本研究は、関西福祉大学看護学部の倫理審査委員会の承認 (2009 年 12 月 16 日) を得て実施した。

### III. 結果

対象学生 102 名にアンケート用紙を配布し、91 名から回答を得た (回収率 89.2%)。

「今後、実習をどのように活かせるか」との質問には 84 名から記載があった。記載された内容をリスト化し分類した結果、《コミュニケーション》(40 件)、《対象理解》(36 件)、《学習意欲》(21 件) の 3 カテゴリーとなった。これらのカテゴリーはさらに、《コミュニケーション》は《コミュニケーション技術》と《コミュニケーションの意義・活用方法》、《対象理解》は《生活の理解》《考え方や気持ち》《観察の重要性》《個別性の尊重》、《学習意欲》は《積極的な学習態度》と《体験を通しての理解の広がり》というサブカテゴリーに分類された。

学生が継続的家庭訪問実習を今後活かせるのは《コミュニケーション》40 件が最も多く、次いで《対象理解》36 件と考えていることが明らかとなった。これは、世代を超えた初対面の高齢者とのかかわりを経験することにより、コミュニケーション方法や意義について考えることができ、今後の実習でも活用できるという自信につながったと考えられる。また、《対象理解》として、高齢者の生活の場に身を置き、それぞれの価値観や生活する上での知恵をじっくり聞くことにより、多様性を実感したと考えられる。看護職者として、多様性を認め、個別性を尊重したケアの実践は非常に重要なことであり、早期にその一端を感じ取れたことは良い経験と考える。しかし、《学習意欲》として今後の学習と結びつけられたのは 21 件であった。家庭訪問により見聞きしたことを、自分たちが目指す看護職者の糧として活かすためには、教員がディスカッションの中で意味づけをしっかりと行っていくことが重要であると示唆された。

### IV. 結論

本研究の結果、学生が継続的家庭訪問実習を今後活かせるのは《コミュニケーション》40 件、《対象理解》36 件、《学習意欲》(21 件) の 3 カテゴリーと考えていることが明らかになった。しかし、今後の学習と結びつけて考えていくことが不十分であるため、今後の実習指導で強化していく必要がある。